

論文要旨

氏名	多田葉子
タイトル (日英併記)	Relationship between lingual papilla surface roughness and oral condition in elderly individuals (高齢者における舌乳頭の萎縮度と口腔症状との関連性)
論文の要旨 (日本語で記載)	
<p>高齢社会の到来により、舌痛や溝状舌、地図状舌、平滑舌などの口腔症状を訴える高齢者が増加しているが、これらの患者では、舌乳頭の萎縮を伴っている場合がある。舌乳頭萎縮は栄養不足、糖尿病、口腔カンジダ症、シェーグレン症候群、アレルギーの傾向や循環器系の異常といった全身状態や病態を反映しているという視点は、多くの臨床医に支持されている。舌乳頭の萎縮は、平滑舌とも呼ばれ、臨床的な視診により診断されることが多いが、実際の舌乳頭萎縮度とどのような関連性があるかについては、ほとんど検討されていない。そこで本研究では、上森らの舌乳頭萎縮の臨床分類が客観的な舌乳頭萎縮度とどのように関連しているかについて明らかにし、さらに口腔症状との関連性について評価する目的で、舌乳頭萎縮度を表面粗さ(Ra)として、表面粗さ計を用いて測定し、舌乳頭萎縮度の臨床分類および口腔症状との関連性について調査した。</p> <p>表面粗さは、被験者の舌を前方に呈出させ、安静にし、舌尖から 15mm 後方の舌背部の粘膜を歯科用印象材で印象採得した。印象採得は上森が作成したプラスチックフレームを用い、10mm×15mm の範囲で無圧印象を行った。その印象面の表面を表面粗さ計(Surfcoder SE300)を用いて測定した。縦横約 1mm 間隔で計測して得られた値を、9本のうち最小値と最大値を除いた7本の平均値を、それぞれ縦、横の表面粗さ(Ra)とし、縦 Ra と横 Ra の平均を合計 Ra とした。また、印象採得と同時に、同部位をデジタルカメラで撮影し、舌尖から 15mm の範囲内のランダムな4点の RGB 測定値を求め、赤色度(r)を算出した。</p> <p>舌乳頭萎縮度の臨床分類は、経験年数5年以上の歯科医師3名が舌写真を評価し、2名以上の評価が合致した結果を臨床分類値として、正常、スムーズ、ラフの3群に分類した。吐唾法を用いて安静時唾液量を測定し、唾液湿潤度検査紙(KISO-Wet)を使用して舌上と舌下部の唾液湿潤度を測定した。口腔水分計ムーカス(ライフ社製)を使用して舌上と頬粘膜の口腔水分計値を測定し、酵素分析装置唾液アミラーゼモニタ(ニプロ)を用いて唾液アミラーゼ値を測定した。Ra の測定値と舌乳頭萎縮の臨床分類については、赤色度 r、安静時唾液量、唾液湿潤度、口腔水分計測定値、唾液アミラーゼ測定値、口腔乾燥感や嚥下困難感といった自覚症状および日常の水分摂取量との関連性を多変量解析を用いて統計学的に解析した。</p> <p>被験者は介護関連施設に入所している 106 名で、男性 31 名(平均年齢 74.5±8.2 歳)、女性 75 名(平均年齢 79.5±9.2 歳)であった。Ra 値と年齢に有意な相関は認められず、Ra 値と性別に有意な差を認めなかった。舌乳頭萎縮の臨床分類と横 Ra 値・合計 Ra 値には、有意に正の相関があった。また、臨床分類のスムーズ群では、正常群に比べて舌背部の赤色度が大きかったことから、赤色度 r は舌表面の毛細血管の色調や角化の程度を反映していると考えられた。自覚症状として嚥下困難感のある被験者の合計 Ra 値と縦 Ra 値は、嚥下困難感のない被験者に比べて低かったことから、口腔粘膜萎縮の程度が嚥下障害の自覚症状と関連していることが示唆された。食事以外の水分摂取量が多い被験者では横 Ra 値が高く、舌乳頭の浮腫状態と関連していると考えられた。</p> <p>舌乳頭の萎縮度を測定し舌の色調を分析することは、経時的変化を客観的に記録することができ、臨床的に有用な評価方法であり、嚥下に関する自覚症状や水分摂取量とも関連することが認められた。</p>	